

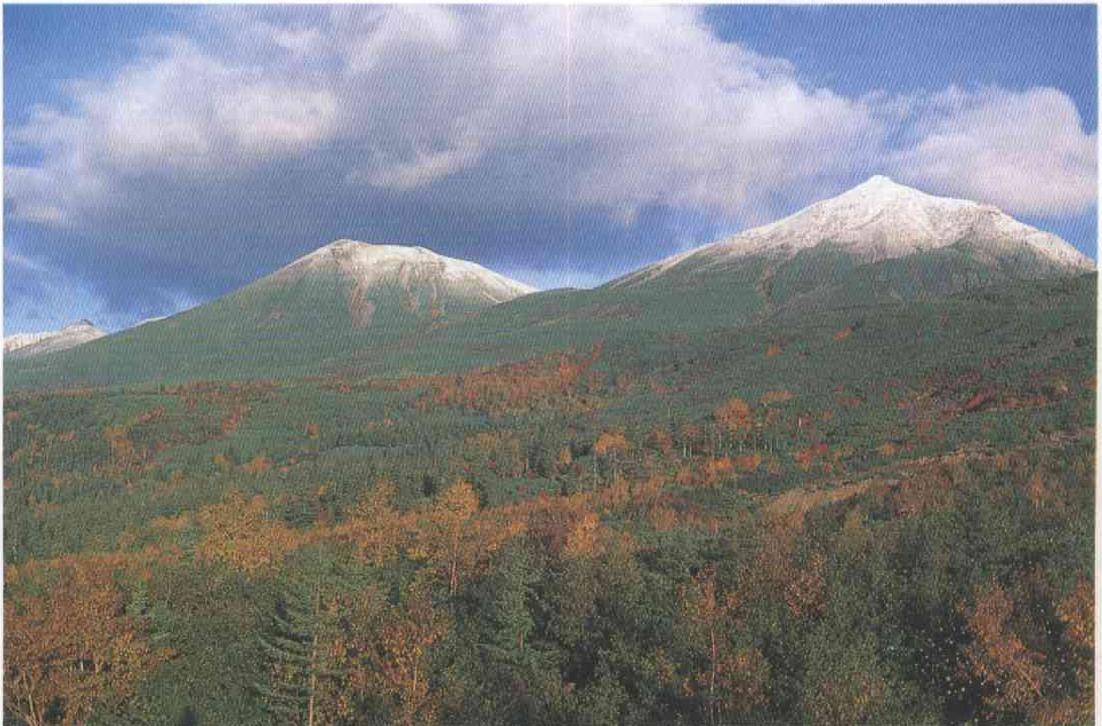
かぐらおが

第 49 号

昭和61年9月1日

編集 旭川医科大学
 厚生補導委員会
 発行 旭川医科大学教務部学生課

(題字は前学長 山田守英氏)



(写真撮影 動物実験施設 稲場 茂)

初雪の美瑛岳・美瑛富士

キャンパスの緑……………美甘 和哉………… 2	第29回東日本医科学学生総合体育大会…………… 6
禁煙席……………原田 吉雄………… 3	研究室紹介(生化学第一講座)…………… 7
卒業生の動向…………… 4	課外活動短信…………… 8
第12回医大祭…………… 5	窓 外…………… 8
第33回北海道地区大学体育大会…………… 6	



キャンパスの緑

美 甘 和 哉

以前に一度この欄に拙文を載せてから丁度10年になる。10年も前のこととなると、当時の大学の様子がどんなものであったか、なかなか思い出せない。しかし、溯って本誌の表紙写真をみると、大学の施設が整ってきた経過がよくわかる。当時は、建築中や完成したばかりの新施設の紹介写真で表紙を飾るのが恒例であった。大学の全景や上空からの俯瞰写真などもよく載ったものである。新しい大学らしい勢いと誇らしげな気分が溢れた写真は、大そう懐しい。ところが、19号を最後にぱったりと大学の写真が載らなくなってしまった。もう7年間にもなるので、いささか淋しい。最近の7年間は、昔のように建築ラッシュはなかったものの、幾つかの新設や増設もあって、それなりに学内の整備が進んできた。時折他の出版物などで見掛ける航空写真は、どうも3~4年前のもののようなので、この辺りで一度最新のものを“かぐらおか”に載せていただけたらと思っている。

実は、新しい俯瞰写真ができたなら、建物以外に以前の写真と是非比較して見たいものがある。それは、大学構内の環境整備、とくに、表題にあげた緑化の状態なのである。お気付きの方も多いと思うが、この3年程の間に樹木の管理が急によくなくて、今年は木が実に生きいきと元気になってきた。嬉しいことには、確かに成長してきているのがわかるほど成果が挙っていることである。おそらく、上空からの写真にもはっきりとした差が現われるに違いないと考えているわけである。

いまさら以前のことは言いたくないのだが、話を進める都合上お許しいただきたい。実は、我が大学は、長い間、植樹はしても育樹はしてこなかった。手が回らなかったのである。せっかく植えた樹木がずいぶん枯れてしまったのを御記憶の方も多いと思う。病院の前庭、本部・図書館の周辺、講義実習棟の前庭などでさえ、そういった有様であったから、裏庭や運動場周辺は全くひどい状態で放置されたまゝであった。大学のキャンパスというイメージから、はるかに遠いものであったといわざるを得ない。雑草のはびこるにまかせた裏庭は、エゾヤチネズミの格好の繁殖地となり、貴重な樹木は何度植えても幹を丸嚙りされて枯死する運命に置かれてきた。前庭の手入れは目覚しく改善されたとはいえ、裏庭の方は今年やっと雑草刈りが始まったばかりなので、正確にいえば上述のことはまだ進行中なのである。

いうまでもないが、庭木や並木というものは、自然に生えるべき所に生えている樹木とは違う。はじめから、

生存条件として十分なものがそろっていないものなのである。我が大学の樹木も将にそのとうりで、植物の成育に必要な有機的・無機的条件のいづれをとっても極めて貧弱なところに、無理矢理植え込まれたものばかりである。それだけに、十分根を張って力がつくまでの数年間は、水をやり、肥料を与え、消毒し、土を柔らかく保ってやるなど、実に多くの手入れが必要なのである。このわかりきったことを10年間殆んど行えなかったことは、忙しい建設期を通じての大学の悩みの一つであったと思う。我が大学の樹木もずい分待たされたが、とにかく、「生き物」として扱われる幸せを享受し始めて、喜んでいるに違いない。

ヨーロッパやアメリカはもちろん世界の多くの国々で、大学のキャンパスといえ、どっしりとした建物、緑豊かな巨木、美しい並木、手入れの行き届いた芝生や花壇というのがそのイメージである。日本でも近年はキャンパスを美しく整えている大学が増えて来ている。たしかに、寒冷地のうえ土質も植樹に向かない神楽岡台地で木を育て、緑一杯のキャンパスを造るのは相当難しい仕事である。相当どころか、日本中で一番難しいところかも知れない。この仕事に挑戦するには、労力も経費も当然沢山要る。また、工夫も要れば、発想の転換も必要であろう。それだけではない、直接担当の人びとだけでなく、他の教職員はもちろん、在学生も卒業生もみんながもっと関心をもち、必要とあればいくらかでも協力をおしまないといった気運が生れてくるのが大切ではなからうか。

本学は教育、研究、診療と本務の機能を十分に果たすことができるようになり、優秀な卒業生を多勢送り出して、まだ歴史は浅いのに、医科大学としてすでに堂々たるものに成長した。今、そのゆとりが、裏庭や運動場周辺の目立たないところまできれいに雑草を刈るという配慮となって、現れたのだと思う。もうこれ以上、貴重な樹木の幹がネズミに嚙られることはないと思いたい。こうして、今年一層勢いづいたキャンパスの整備が、決して後退することなしに前進することを願ってやまない。そして、その成果が顕著に示されるような航空写真が、少なくとも3年に一度くらい、本誌の表紙を飾ってくれるのを希望する次第である。

(生物学 教授)



禁煙席

原田 吉雄

「わたしは、“PAIPO”でタバコを止めました。わたしは、これで（小指を立てて）会社を辞めました。」という思わず吹出してしまったユーモラスなコマーシャルは、煩惱をコントロールすることの難しさを利用した近頃のヒット・コマーシャルの一つであろう。禁煙を主張する人を2つにタイプ分けをすると喫煙の経験が全くない人と、何かの切掛で禁煙をした人に分類できる。前者は、**smoker** として一服の旨さと安らぎを経験したことのない人であり、後者は、それぞれの理由からその楽しみを捨て自分あるいは、身近な人の健康をタバコの害から守ろうとして悪癖からサヨナラした人であろう。いってみれば、禁煙に成功した人々は、これに伴う苦しみを克服して嫌煙に至ったものの、常に喫煙との誘惑と背中合わせで紆余曲折したはずでありタバコ飲みの気持ちを少しは理解できる。何れにしる禁煙を有害として認識していることには違はなく、禁煙家として嫌煙権を主張する。

小生は、後者に属する。20年前にきっぱり禁煙に踏切って以来、タバコの煙には、めっぽう弱くなった。L特急の1ないし4号車に乗ることと決めているが座席を確保することがしばしば難しい点と、子供の騒ぐのには辟易してしまう。航空機のチェックインでは必ず「タバコをおのみですか」と聞くのはいいが、男（近頃は、女性の喫煙者が増加していると聞くが）は、全部タバコを吸うものと思っているようだ。飛行機では常に **nonsmoking section** でおしているが、時間ぎりぎりに乗る時には、しばしば、禁煙席が無いが、あっても喫煙席のすぐ後ろとなる。No smokingのsignが消えると同時に合法的喫煙による前席からたなびく煙から如何に逃れるかの闘いとなる。こんな時には何時も、「禁煙席と喫煙席との間に仕切りをした独立したキャビンとするか、全席禁煙飛行機が日本の空を飛ぶべきであり、いまだに人気の回復しないJALが率先して実行すべきである。」と日航のシュチュワードに苦言を呈する。しかし、全く無視されているようで一向に改善されない。アメリカでは、すでに全機禁煙席の飛行機が飛んでいると聞く。こんな不満が昂じて我が国の代表的交通機関である航空機と国鉄の禁煙席数を調べてみた。航空機の禁煙席が全座席に占める割合は、日本航空国内線のボーイング747SR-super ジェット機では、26%、必要に応じて12%まで増席できる。国際線の747-LRでは20-28%、同じく7-14%まで増席可能との事である。全日空では、国内外を問わず全ての機種で35%、また、ヨーロッパで開発のエア-

バス A-300 では27%、マクドネル・ダグラス社 DC9super では、30.8%との返事であった（東亜国内航空調べ）。ちなみに、北海道における6両編成のL特急では33%、新幹線「ひかり」22%（16両編成）、29%（12両編成）である。果たしてこの値が適正であるか？ 禁煙人口の正確なパーセンテージは渉猟し得た範囲では発見できなかったので日本タバコ株式会社の喫煙人口の推計値から逆算してみた。喫煙者は3,281万人（1986年調べ）で、20才以上の成人男女の総数6,983万人（国民衛生の動向1985）の47%となっている。すなわち、53%が禁煙家ということになり交通機関の禁煙席数は明らかに不足である。日本は、自由平等の国であるので嫌煙権も喫煙権と同様に認知されなければならないはずであるのに禁煙人口がいまだにマイナーとしての待遇しか受けていないことに抗議しなければならない。そして、嫌煙権をもっと声を大にして主張しなければならない。

タバコの害は今更、述べるまでもない。喫煙者自身は良いとしても、周囲の人間に与える悪影響には目を閉り、いかにも美味そうに禁煙を煽らせる神経には呆れてしまう。それにも増して腹が立つのは、自分の子供の前では決してタバコを吸わないが自宅から一步外に出ると平気で喫煙する父親が少なくないことである。

並木教授が「かぐらおか」10号「医者とはタバコをやめよ」で述べておられたように、周りに居るかも知れない嫌煙者にたいする思いやりが全く欠如しているとしか考えようがない。せめて欧米の紳士が同席する淑女に「May I smoke? 」と同意を求める粋な台詞のマナー：気配りが欲しいものだ。

禁煙人口が過半数を越えた今、嫌煙権の確立のためわれわれは、何をすべきか？ 残念ながらこれといった特效薬はない。タバコ好きな方には、① 先ず長期的展望に立って、可愛い自分の子供の前ばかりではなく全ての子等の前ではタバコを吸わないこと、② 医学生は、禁煙をすること（並木教授が医学生に警告された前述の理由と、自分の健康のために）、③ 医師は周囲の嫌煙者に害を与えないように所定の場所で喫煙をすること、④ 公共施設、特に、当病院と臨床講義棟のロビーには排煙設備を備えた喫煙場所を早急に作ること等を取り敢えず提案したい。

（整形外科学講座 助教授）

卒業生の動向

第80回医師国家試験は4月5日・6日に実施され、本学からは119名が受験し（うち61年3月卒業生114名）、116名（同113名）が合格しました。

合格率は97.5%（同99.1%）で全国5位のランクでした。

今年の卒業生の勤務（連絡）先は次のとおりです。

（学生課）

第12回 医大祭

テーマ

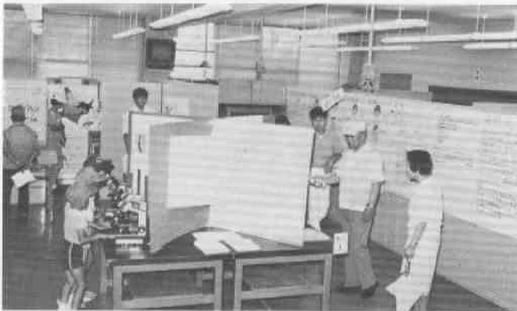
今、原点にかえる

12回目を迎えた今年の医大祭は、6月12日(木)から15日(日)までの4日間、開催されました。

テーマは「今、原点にかえる」で、回を重ねる程にマンネリに陥る医大祭をここで見直し、新たな一步を踏み出そう、ということです。

期間中には、スポーツ大会をはじめ、仮装アドベンチャーレース、田中よしたけコンサート、講演会、医学展、模擬店などの企画が実施され、14・15日の一般開放日には緑が丘をはじめ旭川市内から大勢の市民が見学に訪れました。

(学生課)



第12回医大祭を振り返って

第4学年 尾形 文智

この北の地、旭川もようやく夏らしくなってきた頃、6月12日から4日間第12回目を迎えた医大祭が開催されました。今回は、発足当時から実行委員の人数が少なく(人数は過去最低)その仕事は大変でしたが、何とか終了までごぎつけ一同ほっと一息ついているところです。

今年のテーマは「今、原点にかえる」。パンフレットにも書いたとおり、「一時的な華やかさだけに流されるのではなく、全学生が各々の個性・興味に立ちかえって、そこからその個性の結集としての医大祭を作り上げていこう。」という意味が込められていました。

具体的には、この医大祭を機にして、学生に様々なことを考えてもらおうと、後にも述べるように講演会を2本企画したり、医学展に力を入れるなど努力しました。即ち、市民に見せるためだけの医大祭ではなく、「学生のための医大祭」を強調したかったのです。しかし、実際には、医学展や有志企画などを今一つ大きく盛り上げていくことができずに、その数や参加人数は例年並みとなくなってしまいました。そのために、外面だけを見れば、

かわりばえのしない、むしろ質素は医大祭であったと感じる人も多いかと思います。

今年あまりうまくは行きませんでした。医大祭では飽くまで学生が主役であり何かを研究発表し、そして大いに楽しむ場なのです。来年以降もただ華やかさに流されることのないように努力して欲しいと思います。

今回の医大祭の企画全体を通してみると、毎年行われて学生の中に定着してきたものと、逆に企画自体がマンネリ化して学生に受け入れられなくなってきたと考えられるものがあります。前者の例ではスポーツ大会などが挙げられ、ソフトボール、バレーボールともに数十チームが参加しました。特に今年はバレーボールで第三内科が優勝するなど、学生と教官との交流にも一役買っているようです。一方、後者の例では仮装や夜祭などが挙げられます。今年は特に参加人数が少なく、来年以降検討の必要があると思います。ただ同じことを行うのではなく、その意義、そして内容について十分考えてみる必要があるになってきたことを感じました。

講演会は前述の通り2本行いました。沢内村村長である太田祖電氏、そして作家の三浦綾子さんの2人です。太田氏は多忙のため昨年来依頼された70ヶ所以上の講演を全て断わっているにもかかわらず、我々の依頼を快く引き受けて下さり、沢内村の生命行政の理念について熱弁をふるって下さいました。しかしながら、来場者は70名程度と大変少なく旭医大生の医療に対する関心の低さに多少がっかりさせられました。何故なら、一昨年信州大学で行われた全国医学生ゼミナールでは同氏の講演に600名以上の医学生が参加したのですから。

一方、三浦さんも健康上の理由などからここ数年講演を全て断わっているにもかかわらず、我々の講演を引き受けて下さいました。講演には500人以上の市民、学生が参加し、その中で三浦さんはキリスト者としての立場から「生命」そして「愛」の大切さ、美しさについて熱く語って下さいました。来場者の中には、めったに聞けない三浦さんの講演を聞きにはるばる東京からいらした方、感銘を受けて「是非自分の生徒にも聞かせたい。」と録音を依頼して来た先生などがおり、改めて三浦綾子さんの偉大さを感じました。

また、今年は2年振りにコンサートを行いました。その開催に当たっては議論が分かれたのですが、結局「コンサートを客寄せとして考えるのではなく、我々の手で作り上げていくものなのだ。」という考え方にまとまり開催に踏み切りました。結果的には、担当者の努力の甲斐あり300人の入場者で成功のうちに終わりました。

様々な課題を残しながらも、天候にも恵まれ大禍なく医大祭が終了したことを心から喜んでいます。4月に始まり6月迄、まさに「駆け抜ける」という表現がピッタリするこの医大祭、これから将来、より発展することを願っています。

最後に、様々な企画で頑張った学生の皆さん、そして何よりも実行委員として奮闘努力した皆さん、本当に御苦労様でした。

(第12回医大祭実行委員会委員長)

第33回 北海道地区大学体育大会

第33回北海道地区大学体育大会は、帯広畜産大学が当番校となり、7月4日(金)～6日(日)の3日間、全道45単位大学から4,076名が参加し開催されました。

本学からは17種目 182名が参加し、熱戦をくりひろげました。

なお、大会成績は次のとおりです。

(学生課)



バドミントン	男	札学大	樽商大	札教大	1回戦敗退
	女	道女短	武蔵女短	静修短	棄権
剣道	男	北学園	北大	駒沢教 学園北見	予戦リーグ3位
	女	釧教大	道女短	帯畜大 岩教大	1回戦敗退
弓道 (女子は オープン)	男	札学大	室工大	樽商大	6位
	女	北学園	室工大	札医大	7位
総合	男	道都大	北学園	道工大	19位
	女	道女短	釧教大	帯畜大	9位



大会成績一覧

種目	順位	優勝	準優勝	3位	旭医大
陸上競技	男	函教大	北大	北学園	6位
	女	道女短	函教大	釧教大	11位
準硬式野球		駒沢教	北学園	函教大 道都短	2回戦進出
軟式庭球		道工大	帯畜大	学園北見 樽商大	棄権
バスケットボール	男	道都大	酪学園	釧教大 北学園	1回戦敗退
	女	道女短	札教大	静修短 釧教大	1回戦敗退
バレーボール		道都大	札教大	帯畜大 旭教大	決勝トーナメント 2回戦(棄権決勝) 進出
サッカー		釧教大	岩教大	北学園 帯畜大	1回戦敗退
卓球	男	旭川大	道工大	酪学園 道都大	決勝トーナメント 進出
	女	栄養短	道女短	旭医大 静修短	3位

第29回

東日本医科学生総合体育大会(夏季)

第29回東日本医科学生総合体育大会(夏季大会)は独協医科大学が主管校となり、7月20日～8月8日まで宇都宮市を中心に各競技が行われました。

本学は昨年より2種目多い22種目に参加、陸上競技部(男子)が6年船越(3000m 障害1位)、6年石原(500m 3位)、5年野津(100m 3位、400m 障害1位:大会新)、5年横田(槍投3位)、4年原(三段跳1位、400m 障害2位)らの活躍により昨年に続き準優勝したほか、昨年優勝のバレー部も準優勝、サッカー部、卓球部(男子)が3位の好成績をおさめた。

個人戦では、卓球W大沢・高橋組が準優勝、バドミントンW岩波・田熊組が3位に入るなど各種目に善戦、総合成績は35大学中9位と、昨年同様の健闘であった。

(学生課)

大会成績一覽

種目	順位		優勝	準優勝	3位	旭医
	陸上競技	男	新潟	旭医	筑波	準優勝
女		筑波	女医	千葉		
準硬式野球		北大	群馬	山形	準々決勝進出	
硬式庭球	男	順天	千葉	東医	3回戦進出	
	女	順天	女医B	慈恵	〃	
軟式庭球	男	群馬	北大	筑波	予選リーグ敗退	
	女	女医A	山形	信州	〃	
卓球	男	千葉	山形	旭医	3位	
	女	新潟	千葉	女医A	予選リーグ3位	
バレーボール		筑波	旭医	自治	準優勝	
バドミントン	男	新潟	山形	自治協	2回戦進出	
	女	新潟	自治	札医	1回戦敗退	
サッカー		弘前	順天	旭医	3位	
バスケットボール	男	自治	慶応	東北	2回戦進出	
	女	筑波	聖マ	日大	〃	
柔道		新潟	群馬	福島 東北	決勝トーナメント 進出	
剣道		弘前	慈恵	日昭 大和	〃	
弓道		信州	昭和	山梨	4位	
空手道		独協	信州	埼玉	2回戦進出	
水泳	男	東北	新潟	医歯		
	女	女医	慶応	日医		
ゴルフ		聖マ	独協	東邦		
総合		新潟	自治	筑波	9位	

研究室紹介

■ 生化学第一講座 ■ 山内 卓

昭和51年発行の「かがらおか」第8号に本講座を紹介して以来約10年が経過し、現在の研究テーマは全体としては神経機能の調節機構を生化学的に解明するという方向になってきた。人々の行動はすべて神経の働きによって調節されているが、人の脳には1000億という多数の神経細胞(ニューロン)が存在し、1個の神経細胞にはふつう1,000から10,000個のシナプスがあり、約1000個の他の神経細胞から情報を受けているといわれており、個々の神経細胞が調和を保って働くことにより人々の活動が維持されている。本講座では、この複雑な神経の働きのしくみを調べるために酵素反応を中心に解析を進めている。1つは、神経細胞の機能の調節に重要な役割を果たしているカルシウムやサイクリックヌクレオチドの働きを解析する。これらの物質は、細胞内において蛋白質リン酸化酵素の働きを調節することにより神経伝達物質の合成や分泌あるいは、刺激の伝達や細胞内の物質輸送などのダイナミックな過程を調節していると考えられるので、その分子機構の解析を進めている。もう1つは、神経細胞間の相互の連絡は常に神経伝達物質を介して行われていることから、中枢神経における神経伝達物質であるカテコールアミンやセロトニンの生合成の調節を分子レベルで解析している。一方、細胞の分化やガン化に深くかかわっている生理活性アミンとして重要なポリアミンの代謝の研究も進めている。

本講座では数年来世界的レベルの研究を発表することができ、最近国内外で比較的高い評価が得られるようになった。この間、研究室創設時から助手として研究室の発展に貢献してきた山口睦夫と中田裕康は、それぞれ昭和59年と61年に本学を退職した後、アメリカに行き新しい研究生生活に入っていた。現在山口は San Diego の Scripps 医学研究所で、中田は Bethesda の 米国国立衛生研究所(NIH)で活躍している。代って61年4月に、京都大学から飛松孝正が助手として採用された。59年と60年に大学院生として今井嘉紀と佐藤広和が本講座に入り熱心に勉学に励み基礎知識を蓄えながら研究に取り組んでおり今後の活躍が期待される。また白田克美(第3内科、大学院生)は2年余りの研究を終了し学位論文を発表予定である。

本講座の研究は酵素反応の解析を中心に進められてきた。このような実験法に加えて、今後は、遺伝子工学の手法を導入し、酵素の構造と機能の関係や、DNAのもつ遺伝情報がいかにして脳細胞で発現され神経細胞の働きが決定されるかを明らかにする。また、培養神経細胞を用い1つの神経細胞や1つのシナプスで起る変化を細胞レベルでとらえ、生きた脳細胞で起ると考えられる反応を解析していく。教室員は、生命現象の本質を分子レベルで少しでも深く理解できるようにと研究に励んでいる。

(生化学第一講座 助教授)

課外活動短信

サッカー部

7/12～7/14 総理大臣杯 於：札幌大学グラウンド

1回戦 対 道業大	2-0
2回戦 対 北大医	1-0
3回戦 対 樽商大	2-0
準決勝 対 北大	0-3



怒外

平野日出征

最近の大学生は誤字を書くときよく言われるが、誤字の中には「なるほど」と思わず感心してしまいたくなるようなものがある。その誤字に意図の有無はともかくとして、遊び心、遊びの精神が読み取れるからである。言語は意思の伝達のための重要な手段であるが、それさえも遊びの道具としてしまう心の豊かさを感じないわけにはゆかない。遊び心のあるなしはともかく「我が祖国」、「忠犬幹部」などは、今の日本と若者の姿を重ね合わせてみれば傑作と言えそうである。

ことば遊びで故意に誤字を書く、これを当て字と言ひ、「可哀想」、「出鱈目」、「八釜敷い」などがそうであるが、「ふれ愛」などはなかなかの傑作で、「護美箱」も粋なものである。こうした発想が学生の書く誤字にも見え隠れしていて楽しいのである。それゆえに、この種のもものは当世風でなければおもしろくない。漱石の「巫山戯る（ふざける）」、「没分曉で（わからずやで）」のようなものはルビがなければ読めないし、分つてもなるほどという以上にはゆきそうにない。西洋人の名も昔は、漢字の音を借りて書いていたので、このあたりにも遊び心を出す人がいたようで、芥川龍之助のエッセイの中に、チェホフを「知慧豊富」、メーテルリンクを「暎照燐火」と訓している人のことが話題になっているそうであるが、これは時代を超えて楽しいものである。自分でやればもっと楽しいのであろうが、遊び心で「不倫人」と訓したら当の御本尊が、それを地で行ってしまうことになると、とても笑うどころでなくなってしまう。

運送屋かどこかでアルバイトをしていた時だろうかよく憶えていないが、「「努力の努の字は女の又に力あり」てんだよ、学生さん」などと教えられた。早速、調べてみたら「又の字は手と同じで労働を意味する」とあって正しい意味は分ったが、前者の方が何となく真実味があつておもしろい。「漢和字典には遊びの心がちりばめられている」とは郡司利男先生の言であるが、「猛想」などと書くのは論外として、「妄」の字について、「本義は乱ること。世の乱り、禍を来す原因が女に多き故、女を書きてその義を示す」という解説があつたりするようで、真に愉快な話で、漢和字典も読んでみなくてはという気にさせられる。文字を分析する手法でなぞなぞを作ったりする：天下虫（蚤）、八十一（本）、示不小（二）など、落語でもお馴染の「平林（一八十のもくもく）」もこの類で、「二階の女が気にかかる：櫻」とか、少し高級だが「嵐が山を去りて軒のへんにあり：風車」というものもある。英語にも同工異曲のものがあり、参考までに書くと、punishment (pun-ishment)：だじゃればかりいって叱られる。Masculine: The best line to hook a woman with：女をひっかける最後のライン（線）。Milkshake（ミルクセーキ）：Weaning the baby：赤ん坊を乳から離すこと（おっぱいをゆすぶる）。これに加えて最近の若者のしゃれの傑作を一つ：プライド：プラスチックの井戸。どうです、ヘンデルはグレーテルというのもあります。

最後に一般的なことば遊びの一つ例言、すなわち、下から読むと全く意味が異なるもので、隠語が多くて書けないのが残念である。少し高級なのが回文で「竹藪焼けた」がそれ。結婚のため辞めてゆく女性に「夫唱婦随でたまには婦唱夫随で」などと書いて送るのも一興であるが、横書きでは何のおもしろみもないのが残念である。夏の暑い時、勉強の合い間に、ことば遊びの辞典など読んで大いに意欲を湧きたて、さらに楽しく頭の体操を試みるのも一興ではなからうか。問題の一つ：「狸の卵」とは？

(英語 助教授)